

「チャイルド・ペナルティ」を克服する

小川 公代

女性が働くことを考えるとき、英作家ヴァージニア・ウルフが、より良く生きるためには「500ポンドの年収と自分ひとりの部屋」をもちましようと呼びかけた、その言葉を思い出す。彼女の『自分ひとりの部屋』という名著は、ケンブリッジ大学に著名な作家として招待されたときの講演録である。兄たちは入学したが、彼女自身は女性であるという理由で入学できなかった大学である。筆一本で経済的な自立を勝ち取った女性作家の凄みを感じさせる言葉でもある。

長年、男女間の賃金格差を研究し続けたC. ゴールディンが、2023年、ノーベル経済学賞を受賞した。日本の女性について尋ねられた彼女は、「米国は長い時間をかけ変化を体験し、各世代が新しい世代のもたらしたものに慣れた。だが、日本はあまり適応できていない」と回答し、理由として、日本では「10～15年前に比べ働く女性が著しく増えている」が、「昇進機会もある正社員ではなくパートなどの短時間労働が多い」からと説明した*。それは、ジェンダー・ギャップ指数にも顕著に表れている。日本は、特に政治と経済において男女格差が大きく、146カ国のうち125位と過去最低の順位であった。ゴールディンは、日本だけでなく、米国やスウェーデンでも、家庭で主にケア実践を担うという「チャイルド・ペナルティ」を女性たちが負ってきたおかげで、男性たちが長時間労働に従事することができ、それが男女の賃金格差につながったと説明している。

ウルフは既婚者だったが、心身の疾患で子どもをつくることをあきらめた。皮肉にも、それによって彼女はケア実践から免責され、創作に集中することができたのだ。今の女性たちを取り巻く状況は、自立するための「年収」と「自分ひとりの部屋」を確保する障壁となっている。しかし、社会の構造を変えていけば、いずれ男女が協働して育児に従事することは可能になり、格差は縮まりうることははっきりしたのではないだろうか。

*「日本は女性を働かせるだけではだめ」 ノーベル賞・ゴールディン氏
<https://mainichi.jp/articles/20231010/k00/00m/030/022000c>



撮影：嶋田礼奈

PROFILE

おがわきみよ：上智大学外国語学部教授。ケンブリッジ大学政治社会学部卒業。グラスゴー大学大学院博士課程修了。専門はロマン主義文学、および医学史。著書に『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社、2021）、『世界文学をケアで読み解く』（朝日新聞社、2023）、『ケアする惑星』（講談社、2023）、『感受性とジェンダー（共感）の文化と近現代ヨーロッパ』（共編著、水声社、2023）など多数。